二つの問題

田原音和

昨年の村研大会には病いのためにとうとう出席できなかつた。のみならず、しばらくフイールドを離れていると、焦そうをさえ感ずる。ということは、それだけ農村の変り方が激しいからでもあるが、こちらの方もそれに劣らず気ぜわしくなつているからでもあろう。学問の世界では、激しく変動する対象に対しては、むしろ冷静な透徹した眼こそ必要なはずなのに、そこは凡夫の浅ましさであろうか。そこで、気のついた二つほどの問題をとりあげてみようと思う。

一つは、村落研究に際しての概念の整備という問題である。この問題は、こと新しいこともないが、さいきんではとくに数年前の共同体論争以来、いつそう切実さを加えてきたように思われる。概念自体は研究の手段であるから、変りうることは当然であるとしても、確かな約束がなければ積みあげて検討を加えていくにも手の施しようがない。自然村、同族団という、いまでは古典的な概念の再検討も近時さかんであるが、これらはどういう理論的範疇なのか、どういう歴史的段階ではいかなる具体相をとるのか、というような点について共通の理解がないと、それから以後の概念をつみあげていくのにも非常に困難する。

さいきんでは、農民組織、共同化、新機能集団というような概念もでてきた。概念というよりまだ言葉の段階であるかと思うが、私自身、それを使つたり書いたりしてみて、ときどき新しい言葉まで新しい現象を説くことの難かしさに思いあまることがある。組織論や運動論と関連して、従来とはいくらか異なつた内包をもたせようとする試みであるかと思うが、一方では、戦後時に昭和三十年以降の農村を描く場合のひとつの概識みたいになつてきている。変動の渦中にあつて対象を見究めようとするもどかしさが、これらの用語のうちにこめられている。

しかし、構造分析ないし構造論に対して、組織論はどういう位置づけをもつのか、従来の構造論のなかには農民の主体的役割を論ずる余地がなかつたかどうか、行動的エネルギーさ構造論のなかで扱うときはどういう分析手法が必要なのか、等々の問題を解決してかからぬと、これまでの貴重な遺産を無視してしまうか、いつそ破壊することばかりに終してしまう。過去をふまえぬと組織論の必要性の要請すらも無意味になつてくる。従来から組織論"実践論は、主として構造論とは別個のところで行われてきたことの伝統がここにもあるのだと思うが、同族理論がその反省の産物であつたことなどを改めて根拠する必要がある。組織論と構造論は、単に新旧という対象ではなくて、相即的に行われなければるまい。

それにしても、共同化をはじめとする新しい農民の諸組織を構造論のなかでどう位置づけるか。私は昨年度の村研大会の討論の内容を知らないのでよくわからないが、これまで二度の大会の主題をみると、これを政治体制と村落構造の問題として扱つてきたし、農民の運動と意識をかなり前面におしだして論じるようになつてきた。ちようど機会である。経済史や農業経済学の専門家には多少お気の毒でもあるが、構造論における社会学の諸概念を一度ゆつくり皆なで再検討する会が持てたらと思う。集まりやすいグループをつくつて、専門委員会風に討議して結論をもちよるのも一案であろう。

二つ目の問題は、村落構造の変動論についてである。ここでも変動の過程分析と運動論とが対立的に、ないしは無関係に論じられる

傾向がある。運動論や組織論では、変動の理論ではなくて変革の理論だとよくいわれるが、これも従来の農村社会学における変動論の静態的分析――たいしては変動論の欠如――に対する批判的な見方で貫かれていることは構造論に対する組織論と似たような事情である。こういう見方には、従来の構造論における変動理論の欠如やとつてつけたような手法に対する非難がこめられているが、ひいては変動論をもちえなかつたいままでの構造論を根本から否定する方向にまで進んでいる。

私は、この批判が間違つているとは思わない。ある意味では、戦後の農村社会学の最もめざましい発展方向を示しているものだと思うが、そこにやはり一抹の不安がないわけではない。組織論による構造論の超克、運動論による変動論の脱皮というシエーマは、変革の主体性を農民自身に求めようという点で、従来にない清新さをもつてはいる。しかし、農民の組織や運動は、それ自体構造論的な視野においてみたいと、どうしても浮きあがつてしまいやすくなる。組織も運動も元来、構造に内在的な矛盾に触発されてはじめて可能だからである。むしろ、組織や運動が、まさに脱皮すべき構造にどう対応するか、そのどこからでてくるのか、という点を充分に検討することが先決であると思う。さいきんの実に多様な農民の組織化は、研究者をとまどいさせるのに充分であるし、そしてまたそれらを「農民組織」とでも総称する以外に方法がないと感じさえもする。しかし、それらがいずれも変革的エネルギーにみちているとは到底考えられないし、かといつて何らの内在的理由もなしにつくりだされたのでは勿論ない。こういうときにこそ、村落の構造やその変動をじつくり見究める絶好の機会である。新しい現象や過程を説明する新しい原理をいきたりもつてくるのではなくて、従来の概念や仮説が現実の検証にどこまでたえうるか、という点の考慮ももつと払われていいように思う。

村研大会でのここ数年の傾向は、政治体制と村落から農民組織の問題へと、一連の発展的な主題を中心に討議がすすめられるようになつてきた。いままで光りのあたらなかつた問題領域が浮き彫りにされて、まことに慶賀すべきだと思うが、私のひがみか、どうも現在的関心に偏りすぎるように思われてならない。研究者として、激しい変動期に身をおいている以上、こうした関心は当然すぎる程当然であるが、それぞれの研究者のもつている方法論的な前提をもう少し時間をかけて話し合つてみたいものである。組織論や運動論が、方法的視角としてどこまで有効であるか、従来の構造論や変動論の図式がどういう限界をもつているか。それらを研究者の姿勢とあわせて論じることがぜひともほしいところである。経済史学や経済学から汲みとりえた多くの示唆も、ただ断片的に終らせたくないのである。